

山と博物館

第25巻 第5号

1980年5月25日

大町山岳博物館



一の沢頭より鹿島槍ヶ岳

撮影 仁田 晃司

多雪地帯の山菜

長野県の県北地方は、日本でも最も雪の多い地帯の一つである。このような所では、春の雪消えと共に多くの植物の芽が一斉に発育してくること、雪どけの水のために、水分の補給が十分であることなどで、多くの山菜といわれるみず／＼しい食用植物も相ついで発育して、五月から六月中旬まで誠に多種多様なものが出さかる。

長い冬の間の生活で、生鮮野菜に不自由していたこれらの地域の人たちは、雪の少ない地域の人たちに比して、それらの山菜を利用することもよく知っている。

注意してみると、そのような人たちは、その名を聞いただけで、直ちにそれが山菜であることわかるような地方名をつけて、それを伝承している。それらの名は、長い幾世代かにわたる生活の知恵の結晶ともみられ、それ自身その地域の文化遺産でもある。

最も多いのは、ナ(菜)嘗むべきもの、すなわち食用の意)の語をつけた名であり、次はウド・ゴボウ・フキなど、食用であることの周知の植物名をつけた名である。

その例をあげれば、次のようである。括弧内は筆者の考えたその意味である。ウワバミソウをサワナ(沢菜)またはトロロナ(薯蕷菜)またはミスナ(水菜)またはヨシナ(華菜)。エゾタンポポをクジナ(苦乳菜)。ダイモンジソウをイワナ(岩菜)。ツリガネニンジンをとトキナ(トトキは朝鮮名といわれる)。ナンテンハギをアズキナ(小豆菜)。ニリンソウをコモチナ(子持菜)。バイカモをマツバナ(松葉菜)。ハンゴンソウをイトナ(糸菜)。ヤブカンゾウをアマナ(甘菜)など。また、サワアザミをウシゴボウ(牛牛蒡)。サワオグルマをヤチウド(谷地独活)。オオバコウモリをウトウブキ(空洞蒟)など。このような地方名で呼ぶ人たちは、これらの山菜が絶滅するような採集法はしていない。(長野県文化財保護審議会委員 丸山利雄)

ニホンカモシカの呼び名と語源

板谷 芳隆

和名ニホンカモシカは通常、カモシカと呼ばれていますが、古名、方言、隠語などの呼び名は全国的にみるとかなりの数になるといわれ、その数は蝸牛考(柳田国男編：カタツムリの呼び名を集めたもの)には及ばないにしても哺乳類の中ではカモシカほど、たくさん呼び名をもっている動物はきわめて少ないといわれています。



日本産物誌に載せられているカモシカ図

あの人なつつこい山岳の動物がニホンカモシカと命名される以前にどのようなように呼ばれていたのか、たいへん興味をひかれます。そこで文献目録作成のため取集中の文献の中から呼び名を選びだしたところ、漢字名を含めて約一二〇種あまりあったのでその一部分を年代順に整理した結果を紹介いたします。

呼び名のうづりかわり

一、上代(国の始まりから延暦十三年(七九四年)まで)

日本書紀(七二〇年)の皇極紀に童謡として「伊波能杯彌 古佐屢巢梅野俱 渠梅多彌母 多礙底騰哀囉 歌麻之々能鳥賦」とあり、歌麻之々(カマシシ)の文字が、また後段に「山背王之頭髮斑雜毛にして山羊に似たまへるにたとえたり。」として山羊(カマシシ)の文字が始めて出てきます。この意味について谷川士清は日本書紀通證に次のように説明しています。

「童謡とはもとは児童の歌謡であるが、人事を諷刺し、時の異変の前兆などを暗にうたう歌で、皇極紀の童謡は山背王滅亡の前兆としてよまれたもの。」

伊波能杯彌は石の上、古佐屢巢梅野俱は小猿米焼く、渠梅多彌母は米向で、多礙底騰哀囉は奉而行去歌麻之々能鳥賦は山羊の老翁という意味で、蘇我の入鹿が上宮を焼き白髪まじりのカマシシに似た山背王が

上宮を棄てて深山にかくれることを喻えたもの。(中略) いずれにしても当時はカモシカのことを山羊と書き、加麻之々と呼んでいた。

一方、天武紀には「白鳳十四年壬戌(皇太子より以下及び諸王卿 並て四十八人に罷の皮、山羊の皮を賜ふ。各差有り。」とあり、やはりカマシシが登場しています。

七二一年の常陸国風土記には「風俗の諺に云はく、葦原の鹿は其の味 苦燻く喫ふに山の突に異なり。」とあり、カモシカは当時ヤマノシシとも呼ばれていたようです。

また万葉集(七七七八〇九年)には「高山 峯行六ノ友衆 袖不振來 忘念勿」として穴と詠まれています。古来からこのシシの意味が、猪ノシシか、鹿ノシシか、それともカモシシをさしているのかなど、本居宜長をはじめたくさんの方々が論議してきました。

近年では後述の万葉動物考(東 光治)の論述が目立っています。結論的な文献として澤瀉久孝の万葉集注釈かと考えられるので引用します。「東 光治氏の説はくわしい新説である。高山の峯ゆくししの解釈をそのままきびしい実景と考えなければ、鹿、猪でもよいが、少なくともこの「しし」はカモシカを含めてよいであろう。」とのべています。

二、中古(七九四年から建久三年(一一九二年)まで)

昌住撰による新撰字鏡(八九二年)には加万志之が、藤原時平撰録による延喜式(九〇五—九二七年)の十五内蔵に諸国年料供進として羚羊角が、二十三民部の年料別貢雜物には、遠江国ほか十六カ国からの年料供進として零羊角 和名 加末之々乃都乃が、三十七典業にも零羊角として記述されています。

深根輔仁撰の本草和名(九一八年)には「羊角の説明として、羴一名、山羊 一名、羴羊 一名、野羊、羴羊、山羴、大羊、和名 加末之々の都乃なり。」という記述が、また源 順撰による和名類聚抄(九三二年)

には「羴羊 加萬之々」が、丹波康頼撰の医心方(九八四年)には零羊角 和名加末之之乃つ乃として記述されており、この時代はもっぱらカマシシが通用語となっていたようです。

三、中世(一一九二年から慶長八年(一六〇三年)まで) 註：ゴシック体は中世以降始めて出現した呼び名

慈圓の拾玉集(一三二八—一三四六年)には「松が枝に枕定むるかもししのよそめあだなるわが庵かな」という和歌にカモシシとして登場、東麓の破納の下学集(一四四四年)には「羴羊 カモシシ」として、また中川顯允の石見外記(一四六九年)にも羚羊とあり、この時代になってレイヨウとカモシシが出現しています。

四、近世(一六〇三年から慶応三年(一八六七年)まで)

近世になると文献の数も豊富になり、呼び名も多彩になっています。貝原好古の和爾雅(一六九四年)には「羴羊 カモシシ、カマシシ、ニク」が、野 必大の本朝魚鑑(一六九七年)には「羴羊 和名 加萬之介と加毛之加、仁久のほか、アオシシ、アオシ、アオシカ、アオニクとして記録されています。

貝原益軒の日本釈名(一七〇〇年)には羚羊としてニク、カモシシが、井上玄洞の玄洞筆記(一七〇一年)には羚羊とあります。(羚羊の発音は下明。)

また貝原篤信の自序がある筑前国統風土記(一七〇三年)にはニクとして、寺島良安の和漢三才図説(一七一三年)には「羴 カモシカ、ニク、和名 加萬之介、羚羊、羴羊、九尾牛、俗に介久」と記述しています。

谷川士清の日本書紀通證(一七六二年)には歌麻之々の、加毛之々、爾久として記され、また華誘居士の遠山奇談(一七九八年)には羚羊(註：発音不明)が、太田章三郎の祖谷山日記(一八二五年)には「熊、野猪、鹿、

靈羊、豺狼など、毛の荒きもの、毛のにぎもの、さわにすめり。」とのべ靈羊が登場して

います。
小原桃洞の桃洞遺筆(一八三三年)には、
鹿 一名ニク、クラシシ、カマシカ、シマシカ、カモシカ、アオシシ、カベトリ、カベナ

どの名ありと紹介しています。
鈴木牧之の編撰による北越雪譜(一八三六年)には「鹿、羚羊などは雪には得やすし。」とあり、また植田孟縉の日光山志(一八三七年)には日光諸処の名産としてカモシカをあげています。仁井田好古による紀伊国統風土記には、日高、牟婁両郡の深山中に多しとのべ、張氏猷経、日本書紀、本草和名、和名抄などの文献名を記録しています。

百 茲撰による百品考(一八三九年)にはカモシシ、ニクを、源 伴存撰の古名録(一八五〇年)には日本書紀のカモシシをあげ、「今名 カモシシ 漢名 石羊(管曝雜記)」一名 ニクのほか、倭名類聚鈔の加萬之々、天文写本和名鈔の加萬師之、医心方の零羊角、本草和名の加末之々、詞林采葉抄のカモ完、古今切紙次第のカモシシを、込 羊山口授の本草綱目記聞(註：年代不詳)には和名抄の引用とアオシシをあげています。
以上のとおり近世になるとカモシカが始めて登場、またカマシカ、ニク、クラシシ、シマシカ、アオシシ、アオシシ、アオシカ、アオニク、カベトリ、カベなどの呼び名が出現しています。

五、近代(一八六七年から昭和五四年(一九七九年)まで)

近代になると文献がおびただしく発表されているので時代別(昭和年代は西暦年代とする)に整理してみました。

(1) 明治時代(一八六七―一九二二年まで)
伊藤圭介の日本産物志(一八六七年)には「靈羊 カモシシ、ニク、イワシシ、アオシシ、クラシシ、イハシカ、カベ、カベトリ、

マシカ、シマシカ、カモ」が、明治九年(一八七六年)には中島仰山写生并記による動物図にカモシカ(クラシシ、ニク)が、大槻文彦の言海(一八八九―一八九一年)には「鹿、かも志志、羚羊、かも志か、ニク、くら志志、アラジシ、かま志志、やま志志、鹿鹿」を、岡田信利の日本動物総目録(一八九一年)には下野産獣類の一つとしてカモシカが記録されています。

明治二十五年(一八九二年)の特獵規則第二十五条には「カモシカの保護期は三月十五日―十月十四日までとする。」と定められ、カモシカとして取扱われています。

秋山蓮三は哺乳動物(一九〇三年)の中でカモシカを、一九〇九年の飛州志には長谷川忠崇が、カベトリ、クラシシ、カモシシ、イハトリを、また細川潤次郎は古事類苑(一九一〇年)に「新撰字鏡の加萬志之、本草和名の零羊角」など、また倭名類聚抄の靈羊、類聚名義抄の鹿靈のほか、下学集、本朝食鑑、和漢三才図絵、百品考、延喜式、日本書紀、紀伊国統風土記、桃源遺事などに記載されています。



1973.5.28. 生後3日目の大町12E号

いる呼び名を紹介しています。

一九二二年の動物学雑誌には忙中閑人(註：ペンネーム)が閑人雑鈔と題して玄洞筆記の羚羊のほか、安積寛等著による西山遺事記述(徳川光圀公の生物移入 獣之類 羚羊和名カモシシを紹介しています。(註：西山年々多相成候)の複製(一七〇〇年)の複製版、翻刻本ともに当該記事を深しだすことができませんでした。」

以上のとおり明治時代の文献にはカモシカのほか、イワシシ、イワシカ、マシカ、カモ、イワトリ、ヤマシシなどの呼び名が登場しています。

(2)、大正時代(一九一七―一九二六年まで)
秋山蓮三の内外普通動物誌(一九一三年)には「カモシカ、カモシシ、クラシシ、ニク、イワシカ、アオシシ」が、一九一三年の動物学雑誌には青木文一郎が本邦における哺乳動物の分布状況と題して「カモシカ、ニク、クラシシ」を、また一九一八年の同誌には松本彦七郎が「四国にカモシカあり」という記事を発表しています。

岡本勇治は大台ヶ原山(一九二三年)に大台ヶ原の動物の一つとして「ニク、カモシカ」をあげ、また同年に和田千蔵が動物学雑誌に「青森県産カモシカの胎児」という記事を発表しています。

河野齡蔵は史蹟名勝天然記念物調査報告(第三輯 一九二五年)に「羚羊、カモシカ、クラシシ、ニク、イワシカ、アラシシ、カベトリ、カベ、シマシカ」のほか、文献として延喜式、日本書紀、和漢三才図絵、本朝食鑑、遠山著聞集(別名 遠山奇談)の記事の一部を紹介していますが、おそらく明治以後の文献で古文獻を紹介したのはこの報告書が初めてかと思われま。

同年には狩猟法施行規則の改正が行われ、カモシカは狩猟から禁猟扱ひされています。同じく岸田久吉は哺乳動物図解にカモシカのほか、ニク、ニクシシ、クラシシ、カモ、ア

ラシシ、アラをあげています。
以上のとおり大正時代にはどの文献にも呼び名はカモシカとして扱われ、新しい呼び名としてはニクシシ、アラが出現しています。

(3)、昭和時代(一九二六―一九三四年) カモシシが天然記念物に指定されるまで)

黒田長礼による日本動物図鑑(一九二六年)にはカモシカが、矢沢米三郎ほかによる日本アルプス(一九二九年)には「羚羊は日本アルプスに分布する天然生の山羊」として、井上梅吉の生物地理学(一九三〇年)にはカモシカ、同年の冠 松次郎の黒部には羚羊として、山梨県山林会の南アルプスと奥秩父(一九三一年)にはカモシカが、柳田国男の山村語彙(山林 一九三二年)には「陸中の一部で羚羊のことをスス」と記録されています。

一九三二年の早苗(東 光治)にはカモシシ、カモシカが、柳田国男の山村語彙(一九三三年)にはアラシシ、ヲドリシシを、矢沢米三郎の史蹟名勝天然記念物調査報告書(一九三三年)には上高地の動物と題してカモシカ、クラシシ、イハシカ、アラシシ、ニクを、日本森林協会の最新林学講義(一九三四年)にはアラシシとして紹介されています。

小野 進の秋田県・奥羽北海の動物を語るにも「山の孤独者カモシカよどこへ行く。」として、また一九三五年には東 光治が万葉動物考の中で「かもしし考として万葉集、哺乳動物図解、大和本草、大台ヶ原山、遠山著聞集、拾玉集に記述されているカモシカの呼び名をあげて考察を加えています。

岸田久吉は日光の植物と動物(一九三六年)の中で日光の獣類と題して「日本動物総目録、哺乳動物、内外普通動物誌の紹介のほか日光地方産哺乳動物目録の中にカモシカを記録しています。

〔大阪営林局 造林課〕 (未完)

借馬遺跡の問題

篠崎 健一郎

ほ場整備事業というのは、いままでも自然の地形に従って、自由な形と広さをもつていた水田を、幅三十メートル、長さ九十メートルの長方形の水田に作り直す仕事である。この事業自体にもいろいろ問題点はあろうが、ここでは埋蔵文化財の問題について考えてみたい。

この事業には大型の土木機械が働いて水田を掘り、土をはこび、ならして、すばらしいスピードで新しい水田を造成していく。今までの農村風景にいろいろと変わっていった小さな地形も、植生もどこかにけしとんで、全く新しい景観が生まれる。小川の魚や草むららの虫など、どうなってしまうのだろうか。しかし何年かすれば自然のうちのあるものは回復してくるにちがいない。全くどうにもならない破壊がおこなわれるのは、地下にある祖先の生活のあと—遺跡—である。



住居跡



出土した土器

借馬遺跡は大町市平地区借馬集落の東方、木崎湖から流れ出る農具川の流域に広がる古代農村のあとである。ここがほ場整備の対象区域になった。

遺跡は学問が本当に必要とする時までは、そっとしておくのがよいのである。その話が持ち上ってきたとき、私たちは何とかして借馬遺跡を掘らずに、そのまま保存することはできないものかと考えた。そのいちばんいい方法は、水田に土をかぶせてしまうことである。けれども、そうするには、ぼう大な量の土をどこからか運んで来なければならぬ。おそらく想像を絶する費用がかかり、その費用の多くの部分が、土地を所有する農民の肩にかかってくることは間違いない。大町市教委は緊急発掘調査にふみ切らざるを得なかったのである。

次は調査団編成の問題である。これだけの調査をするには、高度な専門的知識をもち、多くの発掘体験をもつ相当数の調査員による専任の調査団が必要である。しかし、いまだ大町市に於てこのような強力な調査団を編成することは不可能であり他から人を求めることもできない。結局多少の知識や経験を持つものの、ほとんど素人にひとしい。しかも他に

職場を持っていて、こちらにかりきりになることのできない人たちによる調査体制を組まざるを得ないことになった。

以上の他に費用や調査日数の問題などがあり、発掘調査の途中でも、さまざまな問題が起った。しかし、市教委調査団の協力と県教委の指導によって、ともかくも昨年度の調査を終り、報告書もでき上がった。

調査された立穴住居址は昨年度十戸、本年度二十六戸。地上の掘立の建物址は昨年度四戸、本年度十五戸ほどに上っている。その他にも、さまざまな点で五世紀から九世紀にいたるこの地方の当時の農村の姿が明になってきた。成果があつたといつてよいであろう。

(借馬遺跡調査団長)

友の会だより

・居谷里湿原自然観察会

4月29日と5月5日の両日行われ、ミスバシヨウ、ハナカエデの咲く中で十分自然を満喫した。



居谷里

博物館だより

・カモシカ「大助」死亡

昭和40年6月9日保護され、山羊乳を使用して本館で初めて幼体の人工哺育に成功したカモシカ「大助」は、昨年秋季より体調が思わしくなく、4月25日午後4時30分手当のかわいなく死亡した。飼育年数14年10カ月であった。

借馬遺跡発掘に参加して

遺跡発掘調査の記事を載せるということでも少しは勉強をと、五月の連休を利用して借馬を訪ねてみました。連休ということで高校生も集まり、総勢三十名程の人たちが朝早くから大地を相手に大奮闘。

ほとんどが腰を屈めた作業、時がたつにつれ腰を伸ばすことがしきりとなるのです。背伸びをしながら五月晴れの空に映える北アルプスの山々を望んだり、宴のにぎわいが聞えてきそうなる程の満開の桜をながめたり、汗をぬぐいながら、やつとの春を全身でうけとめました。

何か珍しいものでも出てはこないかと、実は期待して勇んで来たものの、出土するのは土器の小さな破片ばかり。土を削り、土の色を窺い、層をさぐる、まさに大地そのものが相手。百年に一センチ積るといふ土から一つ一つ噛み締めるように時代を探る。その体力と根気の強さに感服いたしました。

春の日ざしの中でさえ腕や顔が真っ黒。これから梅雨の時期をむかえ、発掘調査もいろいろと困難な事もあるかと思ひます。聞くところによると市民の関心もまだまだこのこと。より多くの人たちの協力によってこの調査が順調に進むことを願ひます。(西沢正敏)

山と博物館 第25巻 第5号

発行所 長野県大町市TEL②〇二二

印刷所 長野県大町市依町 大町山岳博物館

定価 年額八〇〇円(送料共)(切手不可)

郵便振替口座番号(長野二二、二九三)